

フリードリヒ・ジールプ (1881-1945) の外国人労働者政策論 —その思想的特徴と背景について—

橋本 泰奈

はじめに 研究の背景—フリードリヒ・ジールプ通りの名称変更をめぐる

ドイツのラインラント・プファルツ州の都市コブレンツの住宅街にフリードリヒ・ジールプ通り (Friedrich-Syrup-Straße) という名の通りがある。フリードリヒ・ジールプ (1881-1945) は、ドイツの労働行政機関¹の初代長官を務め、労働行政および社会政策の発展に貢献した功績から戦後ドイツにおいて高く評価されてきた人物である²。しかし、近年では、ジールプのナチ時代の経歴に注目が集まり、ナチ体制の失業対策や四カ年計画、第二次世界大戦下の外国人強制労働動員、東部経済計画、飢餓政策などへの関与を通じて、ナチ体制に荷担したとして「大物のナチ」や「戦争犯罪人」という評価を受けるようになっている。コブレンツでは、ジールプ通りの名称変更を求める市民運動が起こり、市内全ての通りについて名称の由来が調査され、ジールプ通りの名称の問題性が改めて指摘された³。

1. 先行研究の動向と問題点—フリードリヒ・ジールプの思想へのアプローチ

ジールプの経歴については、ドイツの外国人政策史や労働行政史研究においてしばしば取り上げられてきた。そこでは、ジールプがプロイセンの営業監督官として長年労働者問題に取り組み、ヴァイマル共和国初期に全国職業紹介・失業保険機関初代長官に抜擢された後、シュライヒャー政権時代に労相まで昇格したが、ヒトラー政権下では前職に戻り、再び労働行政機関の長官としてナチの様々な政策の実行に関わったことが指摘されてきた⁴。

一方、ジールプがナチ体制に荷担した動機やその思想的背景については、いまだ明らかにされていない。ジールプは、同時代を生きた労働行政官や親族によって、温厚な性格と卓越した行政能力、豊富な実務経験を兼ね備えた偉大な人物として戦後長らく高い評価を受けてきた。労働行政史研究者のマイアーも、そうした親族や同時代人の証言に基づいて、ジールプは「ナチではなかった」と断定し、ナチであるかのような印象を与えるジールプの言動は、ドイツにとって最悪の事態を回避し、ドイツ国民と労働行政のために最善を尽くそうとしたものであったとの見解を示している⁵。

このような人物評価の問題点は、ジールプの人格や思想を裏付ける史料を十分に提示し

ていないところにある。ジールプは、自身の職務経験を活かして労働問題や社会政策に関する実証研究や理論化にも熱心に取り組んだ人物であり、その成果は様々な書物に残されている。なかには、ジールプの思想や信条を垣間見ることのできる有用な史料として評価できるものもある。本稿では 1918 年に執筆され、1922 年に刊行されたジールプ著『外国人工業労働者』⁶について取り上げ、ジールプの外国人労働者政策論を分析することで、ジールプの思想的特徴とその背景を明らかにする。それによって、ジールプの問題関心や政策構想がナチズムの思想やナチ体制の政策といかに親和性をもっていたかを考察する。

2. フリードリヒ・ジールプの外国人労働者政策論

ジールプ著『外国人工業労働者』は、外国人就労の長所と短所を実証的に分析し、第一次世界大戦後ドイツの外国人労働者政策について独自の見解と構想を述べたものである。この著作は、ジールプの外国人労働者像や思想的特徴、その背景を浮き彫りにするものである。

『外国人工業労働者』での議論から分かるのは、ジールプが外国人労働者を「経済的・文化的水準の最も低い集団」と見なし、外国人労働力の流入や外国人との接触はドイツ国民にとって「重大な危機」であると捉えていたことである⁷。たとえば、職場での外国語の使用によって、「労働者の道徳的水準は明らかに低下し、底辺の外国人によって衝突や不法行為が助長される」うえに、外国人労働者の知識不足や「清潔性の欠如、その他不衛生な生活様式」は、彼らを隔離しない限り、ドイツ人の生命や健康に危険を及ぼす可能性がある⁸と論じられている。また、ジールプは、「異なる文化的水準の民族間の分業は（中略）、文化的水準の比較的高い国にとって国民経済学的には外国への依存、民族衛生学的には民族体の柔弱化や弱体化を意味する」として、外国人就労によってドイツ民族の「最強かつ健全な繁殖」が阻害されることに懸念を示した。さらに、経済的な観点からは、廉価な労働力の流入による賃金の低下や海外送金による外貨流出などを問題視した⁹。

一方、ジールプは、外国人就労には短所を上回る長所があり、とりわけ外国人不熟練労働者は労働市場政策・社会政策上有利であり、経済的にも必要不可欠であるとも主張した。外国人の大部分は労働集約型産業に従事し、経済や労働市場の状況に応じて規制可能な「景気の調整弁」であるため、彼らに「最低限の知識さえ必要としない最低賃金の労働」を与えれば、ドイツ経済の生産性や国際競争力を高め、ドイツ人の経済的・社会的地位の向上をもたらすと考えていたからである¹⁰。さらに、「人間経済学 (Menschenökonomie)」の観点から第一次世界大戦を「厳師」と称し、戦後も戦時と同様に労働市場の計画的な管理規制と産業

間の労働力交換に努めれば、労働力需要に基づく外国人就労規制は可能であるとの展望を示した¹¹。

3. ジールプの思想的特徴とその背景

以上のようなジールプの外国人労働者政策論は、営業監督官としての職務経験が自身の思想形成において重要な基礎となったことをうかがわせるものである。ジールプは、戦時に営業監督官として赴任したオーバーシュレージエンの事例をしばしば取り上げ、自身の主張や見解を経験的に裏付けようとした¹²。また、外国人労働者を経済的・文化的に低劣でドイツ人の生命や健康を脅かす存在として捉える一方、経済全体への影響を考慮して外国人労働力の有用性を強調し、ドイツの労働・社会問題の改善に役立てようとする立場は、経済の生産性や効率性を考慮して、労使の利害調整を図ることが求められた営業監督官としての責務を体現するものであった¹³。

さらに、1890年代から1920年代にかけて営業監督官として多数の工業都市を訪れた経験は、ジールプが外国人労働者政策の構想を描くきっかけとなったとも考えられる。当時プロイセンでは、農村の過剰人口や余剰労働力、ビスマルクの民族主義政策を背景に、東部の農村と西部の都市の間で大規模な人口・労働力移動が生じた。ジールプはその出発点と終着点となった東西それぞれの工業都市の近郊に滞在していた¹⁴。当時のルール地方およびプロイセン東部におけるポーランド人問題に鑑みれば¹⁵、この経験が外国人労働者に関するジールプの問題関心を強めた可能性は高い。

ジールプの思想的特徴とその背景に関するもう一つの注目点は、ジールプの研究活動にある。ジールプが学生時代に入会した社会政策学会は¹⁶、マックス・ウェーバーがエルベ川以東地域の農業に従事するポーランド人季節労働者に関する実態調査を行い、「駆逐理論」を展開したことで知られる。ウェーバーの言説は、ポーランド人季節労働者を文化的に低劣とみなしたうえで、彼らが廉価な労働力として流入することをプロイセン東部諸州における「外国人過多」や離村現象、賃金の低下を引き起こすドイツ国民の危機として警鐘を鳴らし、同時代の政治や社会において大きな論議を呼んだが¹⁷、ジールプの外国人労働者政策論もこのような19世紀末に遡る思想的潮流に棹をさすものであった。

一方、ウェーバーの論調とは一線を画す側面として、ジールプは、外国人労働力の排除が経済的に非現実的であり、むしろ外国人労働力には労働市場・社会政策上大きな利点があると主張した。そして、その利点を活かすためには、自由主義的な経済体制ではなく、第一次

世界大戦下の戦時動員と同様に国家による計画的かつ合理的な労働市場規制が必要であると考えていた。ジールプのこうした視点や立場には、人間経済学の影響を見てとることができる。

人間経済学は、20 世紀初頭にオーストリアの社会哲学・財政社会学者、ルドルフ・ゴルトシャイト (Rudolf Goldscheid) ¹⁸によって提唱された。その特徴は、資本主義による労働者の搾取を批判し¹⁹、人間を自ら環境を変えられる経済的価値のある「有機的資本」²⁰として捉え、教育や医療、福祉の拡充による環境の改善や人間の社会的・文化的進化の促進、労働力の経済的価値を最大限に引き出すことを重視し、経済発展の可能性を追求するところにある。すなわち、人間経済学は、自由主義経済を否定し、労働力の計画的・合理的な管理によって労働・生活条件を改善し、労働力の生産性を質的・経済的に高めることの重要性を説くものであった²¹。

ジールプは、労働市場の計画的な管理規制によって外国人不熟練労働者の経済的利点を活かし、ドイツ人労働者の経済的・社会的上昇を図ることができると論じたが、その思想や論理にはゴルトシャイトの人間経済学に通じるころがあった。また、外国人労働者は文化的・経済的水準が低いとみなし、その流入がドイツ民族の「退化」を招くことを恐れてその防止のために外国人の隔離を求めたジールプの民族衛生学的観点は²²、質の高い教育・医療・福祉を受けた有能な人間に経済的価値を見出し、「低劣な外来人種の氾濫」²³を防ぐために無能な人間の排除に否定的ではなかったゴルトシャイトの社会生物学的観点とも合致する。

ゴルトシャイトは、先行研究で指摘されているように、優生学的な社会進化論を批判した人物である²⁴。しかし、その批判は、生殖や遺伝の操作によって社会問題の解決を図ろうとする優生学的手法に向けられたのであり、有能な人間の増強によって社会進化を促すという発想や目的自体を否定するものではなかった²⁵。その点では、人間経済学は優生学と相反するものではなく、むしろ親和性が高かったと言える。そして、まさにそのことは、ジールプの外国人労働者政策論の本質的特徴でもあった。民族衛生学や人間経済学の観点から「劣等」ととらえた外国人労働力の計画的・合理的な規制を求めるジールプの問題意識や思想は、人種主義と労働力の経済的かつ計画的な操作と使用を基礎として後に展開されたナチの労働政策に通じるものがあつた。

むすびにかえて

本稿では、ジールプの外国人労働者政策論の分析を通じてその思想的特徴を明らかにし、

ナチの労働政策との接点について考察した。そこでは、ジールプの問題関心や思想がプロイセンの営業監督官としての職務経験と同時代の思想的潮流に影響を受けて形成され、その民族衛生学や人間経済学に基づく視点にはナチの思想や政策目的と親和的な部分があったことが明らかとなった。この思想的な親和性を解明すれば、ジールプがナチ体制下の労働政策に深く関与した政治的動機や背景に関する手がかりを掴むことができるだろう。なお、ジールプのナチ体制への関与を考えるにあたって注意すべき点として、失業対策や雇用創出をはじめ、ジールプがナチ体制下に関与した政策の多くは、労働行政機関がヒトラー政権以前から継続的に取り組んでいた課題であったことが挙げられる。したがって、ヴァイマル共和国期からナチ時代にかけてのジールプの業績や言動を長期的な視点からより深く考察すれば、ジールプを軸にヴァイマル共和国期の労働行政機関とナチ時代の労働政策の意図・目的について理解を深め、ヴァイマル共和国期からナチ時代にいたるドイツの労働政策の連続・非連続を検討することができるだろう。この点は今後の課題としたい。

(注) 本稿は、ドイツ・ヨーロッパ研究センターおよび住友生命保険相互会社主催・第 15 回「未来を強くする子育てプロジェクト」による助成金を受けて実施したドイツの外国人労働者政策史に関する研究成果の一部である。

(2024 年 3 月 29 日公開 ※DESK-Miszellen 編集委員会記入)

¹ 本稿では、1927 年に創設された全国職業紹介・失業保険機関 (Reichsanstalt für Arbeitsvermittlung und Arbeitslosenversicherung) を指す。全国職業紹介・失業保険機関は、職業紹介、失業保険、職業相談、および職業訓練の斡旋を担った公的機関であり、当初は、全国労働省の監督下に置かれた。ナチ時代・1939 年に帝国労働省に統合され、戦争準備・遂行においてヒトラー政権を強力に下支えした。ドイツの労働行政史の詳細については、以下参照。Schmuhl, Hans-Walter: Arbeitsmarktpolitik und Arbeitsverwaltung in Deutschland 1871-2002. Zwischen Fürsorge, Hoheit und Markt, Nürnberg 2003; Maier, Dieter G.: Anfänge und Brüche der Arbeitsverwaltung bis 1952. Zugleich ein kaum bekanntes Kapitel der deutsch-jüdischen Geschichte, Brühl/Rheinland 2004.

² Syrup, Friedrich: Hundert Jahre staatliche Sozialpolitik 1839-1939, Scheuble, Julius (Hrsg.), Neuloh, Otto (Bearb.), Stuttgart 1957.

³ Alexander Nützenadel (Hrsg.): Das Reichsarbeitsministerium im Nationalsozialismus. Verwaltung – Politik – Verbrechen, Göttingen 2017; Hennig, Joahim: Es gibt sicher Wichtigeres und Dringlicheres. Dr. Friedrich Syrup, die Stadt Koblenz und die Erinnerungskultur, in: Jahrbuch für westdeutsche Landesgeschichte,

-
43. Jahrgang, Koblenz 2017, S. 559-670; Stadt Koblenz: Friedrich-Syrup-Strasse, <https://www.koblenz.de/umwelt-und-planung/grundstuecke-und-geodaten/stadtvermessung-bodenmanagement/strassenverzeichnis/erinnerungskultur-strassennamen/friedrich-syrup-strasse/> (Stand: 26.02.2024).
- ⁴ Maier, Dieter G.: Friedrich Syrup. Von der Gewerbeaufsicht an die Spitze der Arbeitsverwaltung, in: Ders., Jürgen Nürnberger, Stefan Pabst: Vordenker und Gestalter des Arbeitsmarktes. Elf Biografien zur Geschichte der deutschen Arbeitsverwaltung, Mannheim 2012, S. 115-140.
- ⁵ Nürnberger, Jürgen, Dieter G. Maier: Präsident, Reichsarbeitsminister, Staatssekretär. Dr. Friedrich Syrup. Präsident der Reichsanstalt für Arbeitsvermittlung und Arbeitslosenversicherung. Leben, Werk und Personalbibliografie, Ludwigshafen am Rhein 2008, S. 16; Maier (2012), S. 137-140.
- ⁶ Syrup, Friedrich: Die ausländischen Industriearbeiter, in: Archiv für Exakte Wirtschaftsforschung (Thünen-Archiv), Jena 1922, S. 278-301.
- ⁷ Ebenda, S. 295.
- ⁸ Ebenda, S. 296.
- ⁹ Ebenda, S. 296-297.
- ¹⁰ Ebenda, S. 296-300.
- ¹¹ Ebenda, S. 300-301.
- ¹² Ebenda, S. 288, 298.
- ¹³ Simons, Rolf: Staatliche Gewerbeaufsicht und gewerbliche Berufgenossenschaften. Entstehung und Entwicklung des dualen Aufsichtssystems im Arbeitsschutz in Deutschland von den Anfängen bis zum Ende der Weimarer Republik, Frankfurt am Main 1984.
- ¹⁴ Maier u.a. (2012), S. 118-121.
- ¹⁵ 伊藤定良『改訂新版 ドイツの長い十九世紀』(青木書店、2002年); 伊藤定良『異郷と故郷—近代ドイツとルール・ポーランド人』(有志舎、2020年)。
- ¹⁶ Nürnberger, Maier (2008), S. 15.
- ¹⁷ Weber, Max: Die Verhältnisse der Landarbeiter im ostelbischen Deutschland, Leipzig 1892; Bade, J. Klaus: Sozialhistorische Migrationsforschung, Göttingen 2004, S. 225-226; 今野元『マックス・ヴェーバーとポーランド問題—ヴィルヘルム期ドイツ・ナショナリズム研究序説』(東京大学出版会、2003年)。
- ¹⁸ 大島通義『予算国家の「危機」—財政社会学から日本を考える』(岩波書店、2013年)、第二章。
- ¹⁹ Goldscheid, Rudolf: Entwicklungswerttheorie, Entwicklungsökonomie, Menschenökonomie. Eine Programmschrift, Leipzig 1908, S. 112-113.
- ²⁰ Goldscheid, Rudolf: Höherentwicklung und Menschenökonomie. Grundlegung der Sozialbiologie, Leipzig 1911, S. 439, 488.
- ²¹ Bröckling, Ulrich: Menschenökonomie, Humankapital. Eine Kritik der biopolitischen Ökonomie, in: Mittelweg 36, Heft 1, Hamburg 2003, S. 6-13; 佐藤滋「財政社会学が捉える国家と社会」、『三田学会雑誌』(慶應義塾経済学会、2015年)、107(4)、45(589)~46(590)頁。
- ²² Syrup (1922), S. 295, 299.
- ²³ Goldscheid (1911), S. 474.
- ²⁴ Ebenda, S. 319-320.
- ²⁵ Bröckling (2003), S. 8.